

紹介

銭 存訓著

宇都木章・沢谷昭次・竹之内信子・
廣瀬洋子訳

『中国古代書籍史』

——竹帛に書す——

本書は、「印刷術発明前の中国における書籍の制度および銘文の起源と発展について論述したものである。」(xi頁)原著は

Tsuen-hsuan Tsien, *Written on Bamboo and Silk; The Beginnings of Chinese Books and Inscriptions*, Chicago: Univ. of Chicago Pr. 1962. 邦訳に先立ち、『中国古代書史』の題名で中国語訳改訂版(香港中文大学・一九七五年)も出版されている名著である。このたびの日本語訳は、待望の訳業といっても過言ではない。

各章の内容と主な論点は、次の通りである。

第一章—緒論—では、古代中国における

書籍の発展の社会的背景と、その学術的意義とについて、卜辞から仏典の翻訳に至るまでを概観し、この大量の仏典蒐集にこそ印刷術発明の原動力があったと示唆する。

第二章—甲骨文—では、その起源・性質から研究のあらまし、書体・形式および具体的な内容などに説き及ぶ。また、「記事文」と総称される一群の刻辞が、一般の卜辞と異なり、総じて細長い骨簡を用いていることは、同様に細長い形をした簡牘が殷代に常用されていた証左ではあるまいか、との推定も興味深い。

第三章—金文と陶文—は、青銅彝器・鏡・貨幣の銘文と、印章・封泥、陶器や瓦磚に施された銘を扱う。土器の銘文も青銅器のそれとも、所属関係の表示といった共通の起源をもっていること、また、戦国秦漢の有銘の土製品は、主に簡牘の機密保持に用いられた封泥が煉瓦や瓦に応用された結果であること、などが指摘されている。

第四章—玉・石の刻辞(銘文)—では、秦の石鼓文から漢六朝期の石碑・摩崖・墓誌銘・地券とたどり、經典の恒久的かつ正

確な保存という、学術史上に画期的な意味をもつ石經の事業について解説する。さらに章末には拓本技術に関する一節を特設しているが、これは、石刻の文字を墨で拓模する技術こそ遂には木版印刷技術を生み出した、とする著者の見解によるものである。

第五章—竹簡と木牘—は、簡牘の材料・形式・書体から装丁にいたるまでを概述する。著者は、書写材料としての竹の使用は木に先行すると考え、一簡一行という簡牘の伝統形式が竹簡を割った際の狭い面積に由来すること、竹帛の使用が既に先秦文獻に見えるのに対し「牘」字の出現は漢代に下ること、また戦国漢初の簡策の多くが竹製であること、などを証拠として挙げている。

第六章—帛書—では、竹と並ぶ代表的な書写材料としての絹の役割を論ずる。文獻と出土遺物とから帛書の年代・種類・素材などに触れたのち、書写面の広さ、地の白さ、吸収性といった特性の反面、高価でもあった絹は、いきおい竹簡とは異なる特殊

な用途——価値ある書物の定本や地図など——に用いられることになった、と説く。

第七章——紙巻——は、古代中国の生んだ貴重な文化遺産・紙の歴史に充てられる。今日までの考古学的知見により、紙の西方起源説が成り立ち得ないこと、それは既に蔡倫に先立って中国に存在したこと、などが力説される。

第八章——書写用具——は、墨・筆・硯と書刀に関する一章である。ここで注目すべきは、宋の趙希鵬いらい無批判に踏襲されてきた漆から墨へという発展図式を否定したことであろう。すなわち、漆書の考古学的な証拠がないばかりか、混ぜ合わせれば書き難く、乾きも悪く、だいいち筆につけて書き得ない、といった漆の性質を、この図式は全く考慮していない、というのが著者の主張である。

第九章——結論——は、上述した各章の要点整理である。拓本の技術と大量の宗教文獻の需要とが印刷術の発明・発展を促したという見解が、再度確認されている。

このように本書は、多岐にわたる内容を

限られた紙幅の中に要領よくまとめてあり、中国古代の書籍・銘文への入門書として推奨するに足る一書である。加えて、日本語版の訳文は正確かつ読みやすく、翻訳であることを感じさせない。また、訳者の手になる二十三箇条の補注と参考文献・索引とは、六〇〇に余る原注と共に、諸説の通観・検策にきわめて便利である。こうした訳者の心配りが本書の利用価値を一層高めていることも、ここに申し添えておくべきであろう。

(四六判 二九〇頁 一九八〇年九月
法政大学出版局 二四〇〇円)
(硯山 明 京都大学大学院生)

『三国遺事索引』

『三国遺事』（一然撰、一二八〇年代成立）は、朝鮮古代研究の最重要史料のひとつであるが、その索引として、韓国精神文化研究院（京畿道城南市）の古典研究室によって編纂されたのが本書である。院長李瑄根氏の「刊行辞」によれば、委員長の李

箕永氏をはじめ、徐景湊・鄭柄朝・張忠植・金鉉鉉諸氏ほかの編輯委員による、「一年余」の作業の成果であるという。これまで『三国遺事』の索引としては、李弘植氏の編になるものが、『歴史学報』第五輯（ソウル、一九五三年七月）に収録されており（崔南善編『三国遺事』（民衆書館、ソウル）にも転載）、また金恩燁氏による『完訳三国遺事』（朝日新聞社、一九七六年四月）の巻末の索引も有用であったが、これほど大部なものをはじめでであり、『三国遺事』利用者の一人として、まずはその刊行を大いに喜びたいと思う。

底本としては民族文化推進会刊影印本（ソウル大学校中央図書館所蔵・中宗七年刊本の影印）を用いているが、幸いなことに、学習院東洋文化研究所刊の影印本（天理図書館所蔵〔今西龍氏旧蔵〕・中宗七年刊本）も、全く同じ頁割りをしているため、ほぼ同じ条件で利用することができる。しかしそれ以外の活字本等については、巻末に「三国遺事諸本ページ対照表」を附し、新修大蔵経本・崔南善本・檀相老本・李丙